

狼森と笊森、盗森

宮沢賢治

青空文庫

小岩井農場の北に、黒い松の森が四つあります。いちばん南が
オイノもり狼ぎるもり森で、その次がぎるもり箎森、次は黒坂森、北のはずれはぬすとも盗
もり森です。

この森がいつごろどうしてできたのか、どうしてこんなきたい奇体な
 名前がついたのか、それをいちばんはじめから、すっかり知って
 いるものは、おれ一人だと黒坂森のまんなかのおお巨きないわ巖が、ある
 日、いぼ威張つてこのおはなしをわたくしに聞かせました。

ずうつと昔むかし、岩手山が、何べんもふんか噴火しました。その灰でそこ
 らはすっかり埋うずまりました。このまっ黒な巨きな巖も、やっぱり
 山からはね飛ばされて、今のところに落ちて来たのだそうです。

噴火がやつとしずまると、野原や丘には、穂のある草や穂のない草が、南の方からだんだん生えて、とうとうそこらいつぱいになり、それから柏や松も生え出し、しまいに、いまの四つの森ができました。けれども森にはまだ名前もなく、めいめい勝手に、おれはおれだと思っただけでした。するとある年の秋、水のようにつめたいすきとおる風が、柏の枯れ葉をさらさら鳴らし、岩手山の銀の冠には、雲の影がくつきり黒くうつっている日でした。

四人の、けらを着了た百姓たちが、山刀や三本鍬や唐鍬や、すべて山と野原の武器を堅くからだにしばりつけて、東の稜ばった燧石の山を越えて、のっしのっしと、この森にかこま

れた小さな野原にやって来ました。よくみるとみんな大きな刀もさしていたのです。

先頭の百姓が、そこらの幻燈げんとうのようなけしきを、みんなにあちこち指さして

「どうだ。いいとこだらう。畑はすぐ起せるし、森は近いし、きれいな水もながれている。それに日あたりもいい。どうだ、俺おれはもう早くから、ここと決めて置いたんだ。」と云いいますと、一人の百姓は、

「しかし地味ちみはどうか。」と言いいながら、屈かがんで一本のすすきを引き抜ぬいて、その根から土てのひらを掌てのひらにふるい落して、しばらく指でこねたり、ちよつと嘗なめてみたりしてから云いいました。

「うん。地味じみもひどくよくはないが、またひどく悪くもないな。」

「さあ、それではいいよよここときめるか。」

も一人が、なつかしそうにあたりを見まわしながら云いました。
「よし、そう決めよう。」いままでだまって立っていた、四人目の百姓ひやくしやうが云いました。

四人はそこでよろこんで、せなかの荷物をどしんとおろして、それから来た方へ向いて、高く叫さけびました。

「おおい、おおい。ここだぞ。早く来こお。早く来お。」

すると向うのすすきの中から、荷物をたくさんしよつて、顔をまっかむかにしておかみさんたちが三人出て来ました。見ると、五つ六つより下の子供こが九人、わいわい云いながら走つてついて来る

のでした。

そこで四人よつたりの男たちは、てんでにすきな方へ向いて、声を揃そろえて叫びました。

「ここへ畑起してもいいかあ。」

「いいぞお。」森がいっせい一斉にこたえました。

みんなは又また叫びました。

「ここに家建ててもいいかあ。」

「ようし。」森は一ぺんにこたえました。

みんなはまた声をそろえてたずねました。

「ここで火たいてもいいかあ。」

「いいぞお。」森は一ぺんにこたえました。

みんなはまた叫びました。

「すこし木貫きいもらつてもいいかあ。」

「ようし。」森は一齐にこたえました。

男たちはよろこんで手をたたき、さつきから顔色を変えて、しんとして居た女やこどもらは、にわかにはしやぎだして、子供らはうれしまぎれに喧嘩けんかをしたり、女たちはその子をほかほか撲なぐつたりしました。

その日、晩方までには、もう萱かやをかぶせた小さな丸太の小屋が出来ていました。子供たちは、よろこんでそのまわりを飛んだりはねたりしました。次の日から、森はその人たちのきちがいのようになって、働らいているのを見ました。男はみんな鍬をピカリ

ピカリさせて、野原の草を起しました。女たちは、まだ栗鼠りすや野鼠ねずみに持って行かれない栗くりの実を集めたり、松を伐きつて薪たきぎをつくつたりしました。そしてまもなく、いちめんの雪が来たのです。

その人たちのために、森は冬のあいだ、一いっし生懸命しょうけんめい、北からの風を防いでやりました。それでも、小さなこどもらは寒がつて、赤くはれた小さな手を、自分の咽喉のどにあてながら、「冷たい、冷たい。」と云つてよく泣きました。

春になつて、小屋が二つになりました。

そして蕎麦そばと稗ひえとが播まかれたようでした。そばには白い花が咲き、稗は黒い穂を出しました。その年の秋、穀物がとにかくみのり、新しい畑がふえ、小屋が三みつになつたとき、みんなはあま

り嬉^{うれ}しくて大人までがはね歩きました。ところが、土の堅^こく凍^おつた朝でした。九人のこどもらのなかの、小さな四人がどうしたのか夜の間に見えなくなっていたのです。

みんなはまるで、氣違^{きちが}いのようになって、その辺をあちこちさがしましたが、こどもらの影^{かげ}も見えませんでした。

そこでみんなは、てんでにすきな方へ向いて、一^{いっしよ}緒に叫びました。

「たれか童^{わらし}やど知らないか。」

「知らない」と森は一斉にこたえました。

「そんだらさがしに行くぞお。」とみんなはまた叫びました。

「来お。」と森は一斉にこたえました。

そこでみんなは色々の農具をもって、まず一番ちかい狼オイノモリ森もりに行きました。森へ入りますと、すぐしめつたつめたい風と朽葉くちばの匂においどが、すつとみんなを襲おそいました。

みんなはどんどん踏みこんで行きました。

すると森の奥おくの方で何かパチパチ音がしました。

急いでそつちへ行つて見ますと、すきとおったばら色の火がどんどん燃えていて、狼オイノが九疋くひき、くるくるくるくる、火のまわりを踊おどつてかけ歩いているのでした。

だんだん近くへ行つて見ると居なくなつた子供らは四人共、その火に向いて焼いた栗や初はつたけ茸などをたべていました。

狼はみんな歌を歌つて、夏のまわり燈籠とうろうのように、火のまわ

りを走っていました。

「狼森のまんなかで、

火はどろどろぱちぱち

火はどろどろぱちぱち、

栗はころころぱちぱち、

栗はころころぱちぱち。」

みんなはそこで、声をそろえて叫びました。

「狼どの狼どの、童^{わら}しやど返して呉^けろ。」

狼はみんなびっくりして、一ぺんに歌をやめてくちをまげて、

みんなの方をふり向きました。

すると火が急に消えて、そこらにはわかにかに青くしいんとなつて

しまったので火のそばのこどもらはわあと泣き出しました。

狼は、どうしたらいいか困ったというようにしばらくきよろきよろしていましたが、とうとうみんないちどに森のもつと奥の方へ逃げて行きました。

そこでみんなは、子供らの手を引いて、森を出ようとなりました。すると森の奥の方で狼どもが、

「悪く思わないで呉ろ。栗だのきのこのだの、うんとご馳走したぞ。」と叫ぶのがきこえました。みんなはうちに帰ってから栗餅をこしらえてお礼に狼森へ置いて来ました。

春になりました。そして子供が十一人になりました。馬が二足来ました。畠には、草や腐った木の葉が、馬の肥と一緒に入りま

したので、粟や稗はまつさおに延びました。

そして実もよくとれたのです。秋の末のみんなのよろこびようといったらありませんでした。

ところが、ある霜しもぼし柱しらのたつたつめたい朝でした。

みんなは、今年も野原を起して、畠をひろげていましたので、

その朝も仕事に出ようとして農具をさがしますと、どこの家うちにも山刀なたも三本さんぼん鋏ぐわも唐とう鋏ぐわも一つもありませんでした。

みんなは一生懸命そこらをさがしましたが、どうしても見附みつかりませんでした。それで仕方なく、めいめいすきな方へ向いて、いっしょにたかく叫びました。

「おらの道具知らないかあ。」

「知らないぞお。」と森は一ぺんにこたえました。

「さがしに行くぞお。」とみんなは叫びました。

「来お。」と森は一斉に答えました。

みんなは、こんどはなんにももたないで、ぞろぞろ森の方へ行きました。はじめはまず一番近い狼オキノモリ森に行きました。

すると、すぐ狼オキノモリが九足出て来て、みんなまじめな顔をして、手をせわしくふって云いました。

「無い、無い、決して無い、無い。外ほかをさがして無かったら、もう一ぺんおいで。」

みんなは、尤もつともだと思つて、それから西の方の笹ざるもり森に行きました。そしてだんだん森の奥へ入って行きますと、一本の古い柏かしわ

の木の下に、木の枝でえだあんだ大きな笹が伏ふせてありました。

「こいつはどうもあやしいぞ。笹森の笹はもつともだが、中には何かがあるかわからない。一つあけて見よう。」と云いながらそれをあけて見ますと、中には無くなつた農具が九つとも、ちゃんとはいっていました。

それどころではなく、まんなかには、黄金色きんの目をした、顔のまっかな山男が、あぐらをかいて座すわっていました。そしてみんなを見ると、大きな口をあけてバアと云いました。

子供らは叫んで逃げ出そうとしましたが、大人はびくともしないで、声をそろえて云いました。

「山男、これからいたずら止やめて呉けろよ。くれぐれ頼たのむぞ、これ

からいたずら止めで呉ろよ。」

山男は、大へん恐きようしゆく縮しゆくしたように、頭をかいて立つて居おりました。みんなはてんでに、自分の農具を取つて、森を出て行こうとしました。

すると森の中で、さっきの山男が、

「おらさも粟餅持つて来て呉ろよ。」と叫んでくるりと向うを向いて、手で頭をかくして、森のもつと奥へ走つて行きました。

みんなはあつはあつはと笑つて、うちへ帰りました。そして又また粟餅をこしらえて、狼森と笹森に持つて行つて置いてきました。

次の年の夏になりました。平らな処ところはもうみんな畑です。うちには木小屋がついたり、大きな納屋なやが出来たりしました。

それから馬も三疋になりました。その秋のとりいれのみんなの悦よろこびは、とても大へんなものでした。

今年こそは、どんな大きな粟餅をこさえても、大丈夫だいじょうぶだとおもったのです。

そこで、やっぱり不思議なことが起りました。

ある霜の一面に置いた朝納屋のなかの粟が、みんな無くなつていました。みんなはまるで気が気でなく、一生けん命、その辺をかけまわりましたが、どこにも粟は、一ひとつぶ粒もこぼれていませんでした。

みんなはがっかりして、てんでにすきな方へ向いて叫さけびました。「おらの粟知らないかあ。」

「知らないぞお。」森は一ぺんにこたえました。

「さがしに行くぞ。」とみんなは叫びました。

「来お。」と森は一いっせい斉にこたえました。

みんなは、てんでにすきなえ物を持って、まず手近のオイノ狼もり森

に行きました。

オイノ狼共は九足共もう出て待つていました。そしてみんなを見て、

フツと笑つて云いいました。

「今日も粟餅だ。ここには粟なんか無い、無い、決して無い。ほかをさがしてもなかつたらまたここへおいで。」

みんなはもつともと思つて、そこを引きあげて、今度は笹森へ行ききました。

すると赤つらの山男は、もう森の入口に出ている、にやにや笑つて云いました。

「あわもちだ。あわもちだ。おらはなつても取らないよ。粟をさがすなら、もつと北に行つて見たらよかべ。」

そこでみんなは、もつともだと思つて、こんどは北の黒坂森、すなわちこのはなしを私に聞かせた森の、入口に来て云いました。

「粟を返して呉^けろ。粟を返して呉^けろ。」

黒坂森は形を出さないで、声だけでこたえました。

「おれはあけ方、まっ黒な大きな足が、空を北へとんで行くのを見た。もう少し北の方へ行つて見ろ。」そして粟餅のことなどは、一言も云わなかつたそうです。そして全くその通りだったろうと

私も思います。なぜなら、この森が私へこの話をしたあとで、私は財布さいふからありつきの銅貨を七銭しちせん出して、お礼にやったのでしたが、この森は仲々受け取りませんでした、この位気性がさっぱりとしていますから。

さてみんなは黒坂森の云うことが尤もつともだと思つて、もう少し北へ行きました。

それこそは、松のまつ黒な盗ぬすともり森でした。ですからみんなも、「名からしてぬすと臭くさい。」と云いながら、森へ入つて行つて、「さあ粟返せ。粟返せ。」とどなりました。

すると森の奥から、まっくろな手の長い大きな大きな男が出て来て、まるでさけるような声で云いました。

「何だと。おれをぬすとだと。そう云うやつは、みんなたたき潰つぶしてやるぞ。ぜんたい何の証しょうこ拠こがあるんだ。」

「証人がある。証人がある。」とみんなはこたえました。

「誰たれだ。畜ちくしやう生、そんなこと云うやつは誰だ。」と盗森は咆ほえました。

「黒坂森だ。」と、みんなも負けずに叫びました。

「あいつの云うことはてんであてにならない。ならん。ならん。ならん。ならんぞ。畜生。」と盗森はどなりました。

みんなももつともだと思ったり、恐おそろしくなったりしてお互たがいに顔を見合せて逃げ出そうとしました。

すると俄にわかに頭の上で、

「いやいや、それはならん。」というはつきりした嚴おごかな声がしました。

見るとそれは、銀かんむりの冠をかぶった岩手山でした。盗森の黒い男は、頭をかかえて地に倒たおれました。

岩手山はしずかに云いました。

「ぬすとはたしかに盗森に相違そういない。おれはあけがた、東の空のひかりと、西の月のあかりとで、たしかにそれを見届けた。しかしみんなももう帰ってよかろう。粟あわはきつと返させよう。だから悪く思わんで置け。一体盗森は、じぶんで粟餅あわもちをこさえて見たくてたまらなかつたのだ。それで粟も盗んで来たのだ。はっはっは。」

そして岩手山は、またすましてそらを向きました。男はもうその辺に見えませんでした。

みんなはあつけにとられてがやがや家うちに帰って見ましたら、粟はちやんと納屋もどに戻っていました。そこでみんなは、笑って粟もちをこしらえて、四よつの森に持って行きました。

中でもぬすと森には、いちばんたくさん持って行きました。その代り少し砂がはいっていたようですが、それはどうも仕方なかったことでしょう。

さてそれから森もすっかりみんなの友だちでした。そして毎まいね年、冬のはじめにはきつと粟餅もちを貰もらいました。

しかしその粟餅も、時節がら、ずいぶん小さくなったが、これ

もどうも仕方がないと、黒坂森のまん中のまっくろな巨おおきな巖いわが
おしまいおしまいに云いつていまいました。

青空文庫情報

底本：「注文の多い料理店」新潮文庫、新潮社

1990（平成2）年5月25日発行

1997（平成9）年5月10日17刷

初出：「イーハトヴ童話 注文の多い料理店」盛岡市杜陵出版部

・東京光原社

1924（大正13）年12月1日

入力：土屋隆

校正：noriko saito

2005年1月26日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

狼森と箕森、盗森

宮沢賢治

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>